

最終回 音楽による癒し

2011年11月号で初めてお目見えしてから、早5年が経過しました。そう気が付いた時、長い間お付き合い頂いた皆様に感謝すると共に、そろそろ会報のカラーを替えた方が良くと思い、今回で終符を打つことにしました。皆様、5年間有り難うございました。

2011年といえば、私達日本人にとって忘れられない年であり、癒しを必要としていたような気がしてこの連載のタイトルを決めました。本当に音楽には心を癒す力が宿っているのです。でも、その形態は一人一人違って、正直に言うと私の書く「処方箋」が皆様を癒せると思っていたわけではありません。ただ、どこかで一生懸命やっている人の話を読んで、その音楽を聴いたら、ほんの一瞬でも心が温まるかもしれない、と僅かな希望を抱きながら、毎回、なるべく多くの会員の皆様に興味を持って頂けるような題材を探して書きました。

最終回は、私個人の陳腐な「音楽の処方箋」をご紹介します。今でこそクラシック音楽漬けの私も、クラシック音楽とは無縁の幼少時代を過ごしましたが、音楽は常に側にありました。幼稚園前は山本リンダで踊り、就学前はアグネス・チャンに自己流の振り付け、小学生では小学校唱歌と合唱曲、中学生でも合唱曲に燃えつつ、松田聖子と中森明菜に恋の痛手を癒され、そしてカンツォーネ・イタリアーナ、特にミルバに夢中になりました。高校生の時は杉山清貴と高校の先輩だったさだまさしを楽しみながら、森田公一歌謡アカデミーで歌謡曲を、カンツォーネ歌手からも個人レッスンを受けては燃える想いを発散していました。音大受験を決めてからは、プッチーニ作曲歌劇《トスカ》で毎朝目覚め、マリア・カラスの声に鼓舞されて一日を始めていました。

ところが音大生になってからは音楽で癒されることからどんどん遠ざかっていきました。自分に欠けている部分を補う努力をしたり、人と競争するようになり、音楽が武器のようになっていたように思います。唯一舞台の上だけは、観客とのエネルギーの交感によって元気になれましたが……。歌手を辞めてからやっと、SRF2で流れてくるクラシック音楽ほぼ全てに癒されるようになりました。でも、私の人生で出会った音楽の中で、1つだけ皆様にお勧めするとすれば……タンゴの革命児アストル・ピアソラとミルバが共演した《エル・タンゴ》というライブ録音でしょうか(写真はその東京公演より)。

その他以前こちらでご紹介したこともあるオルゴールのように、世の中には音楽の力で心身を癒すものがたくさん存在していますが、そのひとつに『Klangmassage』というものがあります。日本にいる甥達の放射能汚染が心配だった頃知り合った方の中で、チェルノブイリの事故の年に生まれたお嬢さんのために、大きな鐘のような楽器を鳴らして、その振動で心身のバランスを整える治療をなさっている方と出会い、その楽器がスイス製だということで買いに行くお手伝いをしたことがありました。その後、偶然にも義妹がKlangmassageの資格を取り、施術室を開いたことから、体験させてもらいました。その波動は多動性症候群から鬱、内臓疾患まで、様々な問題に良い影響をもたらすのだそうです。音の力はまだまだ奥が深そうです。

教会での体験も一種のパワースポットの癒しだと思います。私の家族は私以外皆カトリックなので教会に行かなければならないことも多いのですが、十字架も切れず、オステリア(聖体拝受の、ぶがしのような食べ物)ももらえない仏教徒の私でも、賛美歌の番号が出ると嬉々として聖歌集をめくり、知らない曲でも楽譜に食い入るように音符を追いながら歌います。するとそのうち心が癒されてポジティブ・ハイになっていくので、宗教への勧誘を毛嫌いしている私ですが、音楽による癒しとしては教会もお勧めです。

最後にやはりオペラです。帰途につきながら、幸せになったり、自分の置かれている状況に感謝したりできる大きな癒しの力を持っています。ちなみに、チューリッヒ歌劇場に通い始めて20年以上経ち、一番感激したオペラはアレヴィ作曲《ユダヤの女》です。ヒロインの父親役のテノールが、イスラエル建国メンバーの祖父を持つ筋金入りのユダヤ人、ニール・シコフで、魂が共鳴するような公演でした。

まだ熱々の感動としては、3月にスカラ座で観た《椿姫》は、世界一有名なソプラノ歌手アンナ・ネトレブコの主演に、

イタリアオペラ界の生き字引サンティ指揮、「スカラ座のテノール」フランチェスコ・メーリと大御所バリトン、レオ・ヌッチに豪華な正統派演出でオペラ史の流れを継ぐ歴史上演に立ち会えた幸運に感謝しました。DVDが出たらお勧めです。

オペラ歌手個人としては、バイエルン州立歌劇場のロッシーニ作曲《セミラーミデ》で本家イタリア人達を従えて「現代最高のメゾソプラノぶり」を見せたジョイス・ディドナートが鳥肌ものでした。彼女は

チューリッヒ歌劇場でも《カプレーティ家とモンテッキ家》のロミオ役を歌ったので、ご覧になった方もいらっしやと思います。

今回はお別れに際し、日頃感じる個人的な「音楽の癒し体験」を綴らせて頂きましたが、これらは日々更新されていくので、音楽とのお付き合いは辞められません！番外編として最近出会った癒しの若手音楽家2人も処方箋の最後に綴ります。これからも、会員の皆様が、傍らにお気に入りの音楽を携え、心身共に元気で過ごしにられますよう、願って止みません。



プッチーニ作曲《トスカ》

主演 マリア・カラス ミラノ・スカラ座管弦楽団及び合唱団 EMI

ミルバ&アストル・ピアソラ五十奏団 エル・タンゴ

●VHS~ KING RECORDS 1984年ブッフ・デュ・ノール劇場(パリ)でのライブ ●CD~B.J.L ミルバ&アストル・ピアソラ ライヴ・イン・トーキョー 1988 2枚組

ベッリーニ作曲《カプレーティ家とモンテッキ家》

DVD チューリッヒ歌劇場

ピアニスト Alexander Krichel (特にYouTubeで観られるエコー・クラシック授賞式の際に弾いたシューマンのLiebeslied(献上)は最高のラヴレターですね、と彼に投げたら、「亡き師に献上して弾きましたから」と言われ、ダブル鳥肌でした)

ホルン奏者 Felix Klieser (柔らかく美しい音楽を奏でるが、なんと生まれつき両腕がない！ホルンを専用の台に乗せ、足指で弾いている映像がYoutubeで観られます)